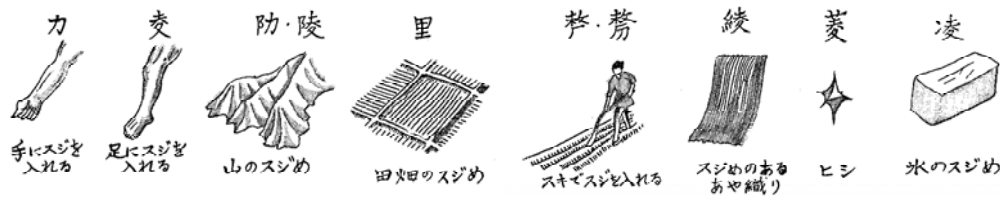


藤堂明保の漢字語彙分類（単語家族論）

藤堂明保（1915 - 1985）は、『学研漢和字典』の編纂者であり、字音が同じであれば何らかの意義の共通性があると考えた「単語家族説」の提唱者である。氏の説は、『漢字語源辞典』（学燈社 1965年）にまとめられている。

氏の単語家族論だが、例えば、「微」と「美」は漢字も異なり意味も違うが、両方ともに本来「小さくて見えにくい」意の語だという。「美」とは「微妙なもの」が本来の意義だったというのである。「微・尾・未・眉・美・没・勿・門・文・民」などの語が、「小さい、よく見えない、微妙な」の語義のグループに分類されている。

また、「すじ、すじめをたてる」という意味のグループがあり、これには「里・理・裏・吏・鯉・…」など17の漢字が含まれるが、これは下図のように説明されている。



このようにして取り出された単語家族のグループは223であり、三千以上の漢字が223にグループ分けされている。また、漢字音は、先のピ（微・美）グループの場合ならば次のように音変化する事が知られている。

微：周 mīuər → 六朝 mīuəi 呉音ミ → 唐 mbīui 漢音ビ → 元 wəi → 北京 wəi

没：周 muət → 六朝 muət 呉音モチ → 唐 mbuət 漢音ボツ → 元 mo → 北京 mo

しかし、氏はここから、次のように発音のタイプ（発音の祖型）を設定している。

タイプ {MUÊR MUÊT MUÊN}

まとめれば藤堂は次のような223タイプを示しているということである。

No.192 微・尾・未・眉・美・没・勿・門・文・民

タイプ {MUÊR MUÊT MUÊN}

基本義：小さい、よく見えない、微妙な

この藤堂の仕事は、一見漢字の分類をしたように見えるが、漢字というのは中国語を表記したものであるから、これは本質的に中国語そのものの分類にほかならない。藤堂は古中国語の語彙を発音と意味によって分類してみせたわけである。

私は、藤堂の223分類をエクセルの表に書き出してみた。そして、頭子音によって並べ替えてみたのである。すると、明確な特徴が浮かび上がってきた。音と意味との間に明確な関連性を見出すことができたのである。中国語は、オノマトペ起源的な音に特定の意味を与え、それが元になって多様に変化して成立した言語であるということがわかったのである。

また、中国語祖型の音と意味との関係は、大和言葉のそれとかなり近いということもわかった。たんに同じようなオノマトペ音を用いているというばかりでなく、発想に類似性がある。例えば、窄むの「ス」という音は、古中国語ではTSに相当し、日本語・中国語ともに「窄まって小さくなる」意を持つとともに、「(芯に) 集まる」意を持つ。K音は「凹む・くるむ・殻」などの意を持ち共通している。詳細は次ページ以下で解説する。

藤堂明保の漢字語彙分類—頭子音別（解説）

本稿は別表「藤堂明保の漢字語彙分類—頭子音別」の解説である。別表で発音のタイプの記載は簡略化してある。{MUÈR MUÈT MUÈN} と3個表記されている場合でも任意の1個しか記載していない。表の第4列目に示した番号に従って解説する。

■ 1音1義で日本語のオノマトペに近いもの

[N]

- ①日本語でもn音は「ねっとり・ネバネバ」など粘着性のあるもの、柔らかいを表すが、中国音でも全く同じである。
- ②「中に割り込む・入れ込む」をn音で表す理由は不明。日本語の擬態語の感覚にはない。ナカ（中）という語はたまたまn音ではあるが。
- ③「もえる」をn音で表す理由も不明。

[P]

- ①日本語のペタンには「平ら」なものを表すイメージがあるが、中国語でも同様である。また「ペタと張り付く」に相当する語もある。
- ②折る・割るの擬態語ポキポキに相当する語である。
- ③ポッと弾けるに相当する擬態語である。
- ④白＝パク、父・夫＝プ、これらをp音で表しているが、その理由は不明。

[S]

- ①日本語で「ささやく」「ささやか」のように、「ササ＝小さい」意を表すが、中国語のs音も同様である。
- ②士＝シ、生＝ショウ、これらをs音で表す理由は不明。

[NG]

- ①NGというのはŋ音である。日本語の「ゴツン、ゴツゴツ」に相当する。「162 切り取る」は「161 かどばっている」に近い語と藤堂は説明している。

[M]

- ①ここでM音が表しているのは、「覆いを被せてものを見えなくしている状態」である。日本語の擬態語ではM音をこのような意味で使うことはないが、あえていえば「探し求める（118）」は「まさぐる」であろうか。
- ②M音が「子を生む、うませる（31）」意を持つのはややわかりにくい、「母体の覆い」から出ることだろうか。日本語の「ムス」が連想される。

[L]

L音は線條のもの、線をなして流れるように動くものを表す。ローローと（朗々と）、リューリュー（細工は流々）は漢語だが、そのL音であり、日本人にも了解しやすいだろう。

- ①線状のもの、筋状のものを表す。日本語では、スーと伸びる、ズーッと続くなどS音が用いられるところである。「148 切れめ、はげしい刺激を与える」は「裂＝亀裂の線が入る」である。「150 もつれる」は線條のものの状態である。
- ②「澄んできれいな」「透明な」も日本語なら「スーと」と表現するところである。
- ③「41 固く囲む、丸く固まる」は他と異質であるが、藤堂氏は klug（せむし）と同系である可能性を示唆しながら、「なるべく複子音を認めない方針」としてL音としている。しかし、後に述べるようにk音は「カーブ」を表すから kl とみた方が了解しやすい。

■ 1音1義だが、意味が分化しているもの

[TS]

TS音は、意味の分類が七項目ある。最初の四項目は、①窄む・縮む、②小さい、③ギザギザ、④集まるとなっているが、これは一連のものである。つまり、

花が窄む→ 縮み小さくなる (②小さい)

花が窄む→ 縮んで皺になる (③ギザギザ)

花が窄む→ 花卉が花心により集まる (④集まる)

この展開方法は日本語と同じであり、S音が「窄む」、「少ない・サシ(狭)・セマシ」、「スダク(集く)、サハ(多)」等の語を作る。(当HPで『大和言葉の作り方』の「サ行」の項を公開している) ⑤揃えるは、「集める」動作の一形態である。藤堂は「全(157)」は△(集める)と工(または玉)の会意文字だと説明している。

⑥「澄み切っている」「速く進む」は、日本語の「スーっと動く」に相当する。『大和言葉の作り方』でも、S音は「吸う・窄む」系と「進む」系の二つあることを示している。

⑦「62 表面をかすめる」について藤堂は「60 小さい・削る=削 SOG」と大差ないと説明している。音韻の後代的な変化もしくはTSOGという復元に問題があるのではないか。

[T]

①日本語のタタク、英語の tap、中国語の「打」「当」のように、t音が「タタク・当たる」意に用いられるということはオノマトペとして理解できよう。「179 ずっしり、下ぶくれ」は文字面だけを見ると了解しにくいかもしれないが、藤堂は右のような図を書いている。

②「平ら」「平らに伸ばした」を表す。日本語でいえば「ペタンとしている」である。「たたいて伸ばした」ものである。③止まる、④突き通るは、日本語の「ツク」が参考になる。「ツ(突)＝突き通る」であり、「ツ(着)＝止まる」である。この点も日本語と類似点があり『大和言葉の作り方』のタ行の項を参照されたい。

⑤この項目は意味が雑多で説明がつかない。「86 上、高い、大きい」は日本語の「タカシ」が連想される。「61 削り取る」「3 道具で人工を加える」は「タタク」の類であろうか。

「9 代」の旁はクイだと言い、それであれば「打つ」と繋がるが、「互い違い」の意とは結びつきにくい。



[K]

K音は、日本語の「クルクル」を思い浮かべるとよい。クルクルは「クルム」のように周りを囲むものを表したり、外側をくるんでいる「殻」を表す語を作る。またクルクルは曲線を表すが、実際中国語でも「カーブ」を意味するし、また凹型にカーブしているのが、クボムである。

中国語のK音と日本語のK音はよく似ているので、まず日本語のK音の造語を示しておく。

クルクル巻く→クルム・コロモ・カコフ(圀)・カコム(カコム)・カラ(殻)

クルクル回す→カク(搔)・コグ(漕)・カフ(交)

クボム(凹)→クル(暮)・クツ(朽)・クダル(下)

では、中国語の分類に従ってすすめる。

①圀う…四角に圀う (19 四角)、丸く圀う (188 丸い)、あるいはワクを意味する。また「163 ふさぎとめる」のような語にもなる。「186 根=じっと止まる」は藤堂氏の「ここまでと人を止めてそれ以遠には人をいかせぬ境目を限という」によったが、多少疑問がある。

②殻をなす…くるんでいるものが「殻」であり、それは概ね内部を保護する固い殻であるから、「101

固＝固い、まっすぐ」「103 強・境＝かっちりと固い、くっきり区切る」のような意味の語になる。日本語の「固い」「渴く」がK音なのは、じつは説明がつきにくいのであるが、不思議に中国語と一致している。

③カーブする…カギ型や曲線で曲がる、中国語ではいずれを表す場合もある。クルムように曲がる。

④凹む…カギ型にえぐりとられた状態、凹んだ状態、穴などを表す。「169 水を勢いよく流す」は「170 つきぬける」の同類として扱ったがやや疑問がある。

⑥間（等間隔）はK音がこの意味を持つ理由不明である。

⑦高い・広がる…次のH音に類似の意味がある。本来H音ではないだろうか。次の両語は欧米語について議論されている gl 音が想起される。

108[KUANG]光・黄（四方に広がる光）

109[HUANG]王・皇・往・兄・永・広・横（大きく広がる）

[D]

D音のうち「119 薄く平らに伸びている」は「T②ペタン」と同じである。「7 もう一つ別の」は不明。

[P L・M L・K L]

P Lはプルプルという擬態語と解される。M LはM音の「かぶせる」に関係があろう。K LはN Gのゴツゴツに関係づけられる。

■日本語との比較

日本語音と中国語音の類似と異同について説明すると次のようになる。

意味的に類似性がある音…n、k、t、t s（日本語ではs）

意味的に類似性がない音…m、p

h・n g・l、w・yについては、音自体が相手側言語にない。

日本語のK音は、語彙数が多く、じつを言うとき一番意味的なまとまりを見つけにくい音である。クダルのように「下」の意味を作る一方、カミ（上）、カカグ（掲）、カサヌ（重）のように「上」の意になったりする。固いや渴くのように、他の語との間に類似を見つけにくい語もあるのだが、中国語のK音にも「固（コ）」「渴（カツ）」などが含まれることは興味ぶかい。

なお、藤堂明保氏の漢字分類についてであるが、すべて正しいということはなく、いくつかの誤りは含むものと思われる。例えば、「裏（LEK）」の基本義を「すじ」とし、裏地にスジのある布地を用いたためとしているが、裏布がいつもスジ目の布地とは限らず、かつ裏のような語は衣服の発生より古いと考えなければならない。

日本語のウラ（裏）、ウシロ（後）のウについては、「ウ＝連続、（本体から）続く」だと『大和言葉の作り方』で説明した。その立場から言えば、中国語においてはL音が連続を表しているように思われる。

音と意味の関係の類似性と起源の同一性は、直接には結びつかない。しかし、中国語も日本語も単音に特別な意味を与え、それを元に語を作るという点では類似の言語であり、ともにユーラシア大陸に存在した単音節文化圏に属すると考えてよいのではなかろうか。